長町女腹切

近松門左衛門作

地例の童の言の葉にいひよる品もよし蘆の。難波の京の物語今の狂歌に取りなせし。京童の口ずさみ落首洛外とり〴〵に。其の一節を繪草紙や。下立賣を堀河へ引廻したる角屋敷。刀屋石見何某とて諸役御免の受領職。折紙太刀の御用迄御所は勿論屋敷方。男たる身の魂の御刀脇差。拵請取所と大看板。見世は弟子に打任せ。誰が下人やら頭やら。放し目貫の性よしもつい焼きつけて悪性に。身を研ぎへらす奉公や跡のこじりの帳面の。つばめ合せと親方が フシ鞘鳴りするぞ道理なり。地主人石見は禪門の白い天窓に黒眼。仕事場を見廻つて詞ヤア己が足音聞いたやら皆細工に精が出るよ。煙草ばかりが仕事ぢやないぞ。彼岸過ぎたりやめつきりと日が短い。夜仕事さしよにも此の油の高さでは儲ける程皆戻る。地ヤ。戻る序に戻橋の鍔は戻つたか。一條の御所様の菊鍔も。九月の御用ぢや合點か。黒鞘が出來たらば烏丸殿へ渡しておじや。二口屋のはみ出し猪熊の革柄。なぜに遅いと毎日二三度使が走る。醒井の親粒もまだ入れてやるまいな。三條小橋の下紙工菖蒲作りの拵も。五月からの誂へ何として出來ぬぞ。長刀直しを研いだらば。辨慶山の町へ持つていけ。兩替町の銀作り御池の町のふち頭。小川通りの背鰄今日明日に持たしてやれ。詞さつきにわせた下の町の酒屋のかみ。入婿が入る引出物にしたいが。娘が望む道具ぢやと大切先の大刀物。地身ばかり買うて去なれたは後家鞘に極つたと。堅い親仁の輕口もフシ刀屋とてや古身なり。地重手代の忠二郎旦那の前に帳面控へ。左介喜八は算盤のさゞんの九月節供前。算用の高見合して詞ヤア。此の半七の大のらめは。帳面も埒明けず今朝から髮へ面出しせぬ。何所へうせた又祇園狂か。宮川町か縄手か。地傍輩どもが知つてをろ。穿鑿せいと喚かるゝ。イヤ半七は昨日から頭痛すると鉢巻で。小座敷に寝て居まする。なんぢや頭痛ぢや。若い身で又しては頭痛のつかへの何のとは皆茶屋酒が過ぎるから。粥でも炊いて喰はしたか。アイ粥の事は扨おき電湯も咽へ通らぬと云うて。やう〳〵と今朝酒の燗して飲んで見て。地どうでも色のない酒は飲まれぬと。苦い顔し乍ら中椀にたつた三杯と。言へば主も興さめて。叱る心も拍子ぬけオクリ笑ひ〳〵暮せし秋の日の。フシ西山近き。染浴衣。愛宕參りに袖を引かれた。フシ是も仇なる世の勤め。四條の水に名を流し。身の憂き數を積みあげし石懸町の井筒屋の。お花よ盛り戀盛り。フシ身を

賣る品はかはれども。地刀屋の半七と深い中ごと正銘の。互の誠研ぎ入れて締めた心の諸捻り其の柄糸のほつれそめ。我が親鮫のつれなさを。スエテ問ひ談合も中絶えし。地いとし男も親方がかり首尾はどうぞと案じほれ。顔の見たさも遣瀬なく舅夫雇うて草鞋がけ。浴衣を假の旅出立。ほんほり綿もひねくろしく背中に嫩の寄るべなき。石見の見世へ頼みませう。ハヽ 詞こりや旦那さんで御座りんすか。内方に居さんす半七殿に。一寸逢ひたう御座りんす。親方ぎよつとし。はていかうりんす〳〵と云ふ女子ぢや。和女は半七が女房か。ハテつがもない私は大阪者。半七が叔母で御座りんすテレ未だりんすぢや。ムウ大阪の叔母御とは。伽羅細工の甚五郎の内儀か。テヽ其の伽羅伽羅。何かの御禮にとう參る筈なれども。地主は細工の人寶貧な世帯の隙無しで。今日迄の御無沙汰大事の甥が出世の門。祝ひ月を心がけ愛宕かけての上り舟。乘合の躺屈さとろ〳〵と寢よよとすりや。うしろからせゝるやら前からは毛の生えた大きな足を突出すやら。齒切するやら寢言やら。可笑いことの數々は山崎から連もあり。あがつてお山を一息に嵯峨へ下りたりや仕合と。釋迦樣の開帳の相伴やらおこゞやら。旅鶴屋で支度して。直に是へと出次第の口は手管に馴々しく。皆樣御免。テヽしんどうと腰かけて。煙管取る手も粗略に。皆樣半七の傍聾柔か。辛苦な仕事で御座りんす。繻子の肌着に色更科の。叔母と名乘りて刀屋に フシ見するは胡散者なりし。ソレ 詞喜八。叔母が逢ひに上られたと。半七に知らせてやれ。誰ぞ茶を進ぜぬか幾人をつても氣が附かぬと。地云ふ内に半七はそつと起きて障子の隙。覗けば馴染のお花なり。南無三寶扨は内々苦勞にした。慾づらの繼父めが年切埈の強請冒。急々にせがむと見えた。其の工面に來たさうな。何にもせよ出過ぎたこと。逢ふも危なし逢はぬも又。仕舞の附かぬ。我が身ぞと。夜着引被りスエテ生きたる心地はなかりけり。地親方は正直一べん半七はなぜ出ぬぞ。詞頭痛でまだ起きられぬか。他人では無しなう叔母御。寢所へいて逢はつしやれ。お山狂ひで酒やら何やら過ぎる故。地煩ひ暮して物も喰はぬ少意見して下されと。そりやそこへ案内せいと。下地は好に据ゑる膳 フシうまい首尾とぞなりにける。地やゝ時過ぎて是も亦愛宕參りの花お札。風呂敷包下人に持たせ。刀屋の石見樣とはこなたか。大阪甚五郎が女房半七に逢ひたい。叔母が來たとおつしやつて下されと。云ひ入るれば家内の上下喫驚して。ヤアこりや何ぢや門にも叔母。内にも叔母。騙か狐に極つたと。不審がるやら怖がるやら中にも亭主は一理窟。ヤア 詞ざわ〳〵と喧しい。奥へ聞えりや詮議がならぬ。默れ〳〵と小聲にて。地おもての叔母御通らしやれこゝへこゝへと云はるゝにぞ。綿帽子取つてしとやかに。詞是はまあ

まあ結構なるお内方。ついしか御出入申さねば何誰樣が何誰樣やら。コレ其所な前髪殿。地盆一枚貸さつしやれ。わたしが事なりや心まで奥樣へ上げまする。樋の上の切荒布花の都へこんな物フシお恥かしやと差出す。地叔母の年配恰好を見ればどこやら面ざしも。半七によく似たり扨は奥なは似せ者めと。思へども念の爲。詞是は〳〵云はれぬこと。女房どもは寺參り戻つたら見せませう。してつきも機もなう半七に。何用あつて上られたと云へば。叔母は打笑ひ。いや半七にさのみ用もなけれども。旦那樣へ少お頼み申す事。つれあひ甚五郎上らるる筈なれども。お屋敷方の御用は多し飛脚でも如何とて。扨私が上りしと下人に持たせし風呂敷より。棒鞘の一腰を取出し是はこれ。信國とや。さる大名の若殿へ藏屋敷から上げらるゝ。大切な拵物大阪にも彼是と。職人衆も多けれど京細工と申し甥子が爲。内方へ頼みます。注文は此の通。さぞ方々の請取御忙しいは存じながら。どうぞ近々に頼み上げまする。此の序に半七めが顔も見たさ。地何やかやに上りましたと差出せば。石見は脇指注文見合せ。是は此方の商賣。心得たとずつと立つてこれ叔母御。戀しがらるゝ甥がざまを見せませう。暫く其處にと云ひ捨てて思ひがけなき一間の障子。蹴破つてつゝと入る。二人はつと驚いて。狼狽廻る胸ぐらを兩手に摑んで。ヤイ詞半七のいき掏摸め。ようも〳〵親方を踏附けたな。あの女が來た時からござりんすが呑込まれぬ。りんすの正體顯れた。お山やら惣嫁やら厚皮面な畫日中。大阪の叔母で候と目利の家へ似せ者を。ぬく〳〵と褒所へ迄手引させ。主に一杯。己れめは旨い所を喰うたな。地親代々の刀屋を太皷持にするのみか。座敷を揚屋に仕くさつたお禮申すと突倒し。柄差箸押取つて散々に撲ち擲く。叔母は此の體聞くよりもはつと人目の恥かしさ。憎うもあれども甥子が雖儀思ひやられて何とがな。此の場の首尾をと氣を碎く。半七花は身の科を云ひくろめんと眞顔にて。詞申し〳〵旦那樣。お氣が違ひはしませぬか。私は兎も角も叔母者人を打擲あり。必ず後悔なさるゝなと云はせも果てずヤア。盗人猛々しく其の樣にてなつてさへ。まだ惣嫁めを勞るか。主の身代空になし天道を掠めをる。ヤイ天罰と云ふもので大阪の叔母が上られた。地目の前へ連れていて叩き殺して腹をいる。サアうせぬかと杖振上げはた〳〵と打つ音に。叔母は悲しく走りより旦那樣暫くと。取附けば振放し縋りつけば突倒し。とかうする間に思案して詞ヤアこりやお吉か。そなたは此所へどうして來た。コレ申し旦那樣。あれは私が妹と地云へば旦那は興さめ顔。半七は猶合點せず花はきよろ〳〵狼狽へる。袖を控へてコリヤ妹。ヤイお吉これ姉ぢや。姉が顔を見忘れたか狼狽者と睨めつけ。目まぜで知らすれば漸々と

心附き。ハアほんに姉様。〳〵。〳〵ぢやと　フシ云ふ聲慄ふばかりなり。地叔母は色目を悟られじと。詞ヤイ大膳者。五條の木賃宿へ行きはせで。地姉さへついど來ぬ内へ騙りらしいこと云うて。來た故にこんな事旦那様のお山ぢやと。御覽じたも御尤。今日も愛宕でわたしをお袋とはか云ひませぬ。それも道理ぢやあの人は腹がはりの姉妹で。十五違ひ半七が爲には叔母なれど。年は甥より二つ下叔母甥のよしみとて。親しうするを知らぬ目で。女夫と見るに、フシとがはなしと。非の入りさうな事どもを。いひくろめたる情の程二人はあつと嬉しさも　フシ夢に夢見る如くぞや。地主の石見まんまとくひ。ムヽウ詞二人ながら叔母御か。よい年して不調法過つた充してもらを。地叔母御怪我は無かつたかと背中さすれば彼方向く。ヲヽ若い人の道理々々。そちらな叔母様頼みます機嫌取つて下され。これ半七。詞言譯してくれともぢ〳〵と勝手へ出で。地皆の奴等うつかりとなぜ茶漬でもして出さぬ。腹の立つた摩句ぢやにけんどんを取りに遣れ。ヤア盃を出して置け。ひつかしかうう己は出見世へいてゐるぞ。はれやれ腹の立つ競ひぐちに。叔母をも知らで見しらしたと　オクリ足早。へにこそ出でにけれ。地跡見送つて半七は。叔母の前に手をつかへ何にも態と申しませぬ。面目ないと有難いと胸は二ツに裂けますと。悔み歎けばお花も涙にしみ〴〵と。私は四條石垣町。井筒屋と云ふ茶屋に花と申す勤の者。半七様とは末々まで面倒見あふ契約に。ちといき詰つた憂きふしの談合に。逢はひで叶はぬ事あつて横着な此の有様。叔母様なら大事の甥を。唆かすとのお憎しみそこも許して下さんせ。いとしいが唯因果ぞと　フシ共に。かこちて泣きければ。叔母も同じ涙にくれさう見た〳〵。詞つれあひは大阪で伽羅屋といへば。町のよい茶屋數方。人に知られて世の有爲無常。此の叔母とても知つて居る。地色事は若い役此の上にどの様な。生きる死ぬるの場になりても。やくたいもない氣を持つまいぞ。世間多い心中も銀と不孝に名を流し。戀で死ぬるは一人もない。流れの身には取分けて。悲しい事酷い事。そこを死なぬが心中ぞや。眞實男可愛くば五度逢ふものを三度逢ひ。二度を一度になす時は親方も機嫌よく。戀に身をうつ　フシ事もない。地二親もない半七叔母一人甥一人。元は知行も取つた筋職人の弟子と朽ち果つれど。可愛いとも不便とも思ふ者は此の叔母一人。末かけて頼みます。今日叔母が上らずば二人の命は有るまいもの。有難や。添や愛宕參りの一驗。佛神のお蔭ぞと意見も親は泣寄の。二人が肝にこたへつゝ　スエテ泣くより外の事ぞなき。地叔母は重ねてやれ半七。涙ついでに今一度泣かねばならぬ此の脇差。見知つてゐるかと差出せば。半七棒鞘の柄引きぬき。刀心を見れば信國。裏目釘の穴察に風と云ふ字

の一字銘。横手を拍つて是は扨。我が家の重代ぞや親の祕藏が年を經て。廻り來るも不思議。なり再び武士に立返る。瑞相なり嬉しやと押戴く脇指を。叔母引つとつてからりと投げ。なう情なのさふらひや。武士になれとて見せはせぬこの脇指故家筋の。かう零落れた因緣咄小耳にも聞きつらん。お花とやらも繫がる人。悲しい咄の一通りを聞いてたも。詞もと我々は伊勢の龜山者。先祖は猪瀨女平とてあの子が爲には祖父樣。お持砲の鑓砲大將百五十石取つた人。同じ家中に高木宮内とて。八百石取る族頭互に無二の中なりしが。上方の取賣が此の脇差を賣りに來て。諸傍輩の附合に祖父さよも望みにて。買求めたい心ざし彼の高木も望をかけ。代物問へば三百貫の折紙。心安さの當座の座興。とは云ひながら高木が麁忽。文平お身の身代では高い物ぢやがお買やるかと。ふつと言ひしも互の不運。苦笑ひにて一座は濟みその取沙汰の國一杯。いはれぬ猪瀨か齒も立たぬ刄物好して高知行の。高木殿と張合つて人中で恥辱うけ。あれでも武士かと言囃す。此の脇指を買はひでは一分立たぬ祖父樣の。武具馬具衣裳夜の物まで代なして。三百貫の折紙代一倍增。二百十兩に買求め直に刀心に一字銘。高木に勝つとの心にて風と云ふ字を彫記し。地明くれば九月十五日登城の道に待ち受け。高木遣らぬと聲をかけ尋常に討畢せ。屋敷へ歸つて祖父樣は娘子供に暇乞。命に替へし此の信國必ず人手に渡すなと。お腹へぐつと押立てて右の脇まで一筋に。地唯一言の義によつて身上をフシ果されたり。地そなたの父樣は叔母が爲には兄樣。其の折しも江戸番直に江戸より浪人あり。永々の憂き苦勞悲しい暮しが病となり。いよ〳〵つらき其の中にも遺言にて此の脇差。詞乞食する迄放すなと藥も飲まず祖父樣の。第三年同じ月に病死ぞや。地悲しいともつらいとも。情なやお袋も亦歎き死に。跡に殘るは叔母と其方。まだ九ツの頑是なし叔母が心を推量あれ。三年に三人まで同じ月に死ぬる事。不思議と思ふ氣が付いて刄物の相性見る人に。詞目利して貰ひしに。祖父樣父樣同じ火性。刀は水の流れ樣以ての外不吉の脇差。寸は一尺四寸五分。地間尺は災難是を其の儘持つならば。三代迄は祟るとある占方に驚いて。捨賣に賣放し廻り廻つて十三年め。詞お屋敷方より此の脇差拵へ仰付けられて。孫子の其方の眼にかゝると。はや親方の打擲の難儀に逢ふもこれ不思議。地武士義しと思やんな一言の答めより。親祖父の命を絕ち子孫迄零落しは。前世の業とは思へども。愚痴な心にあさましい此の脇差がないならばと。科ない刄物に恨が殘りスエテ折つても捨てたい氣なれども。地今では大名のお腰の物。家の敵の此の脇差。主人の樣に撫でさするその時々の身過ほど。悲しい物はなきぞとよ子にも甥にもたゞ一人。奉公大事に勤めてたも。い

としの身やと搔き口說き。膝にもたれて泣きければ半七も伏沈み。お花も退かぬ身の上と語るも聞くも主の內。頷き合ひつ呀きのフシ忍び。泪ぞ哀れなる。詞ヤアうか〳〵話してあれ見世鎖し時。叔母は直に伏見迄夜中でも舟はある。來年のお祓には必ず下りや。此の脇差の拵。注文の通り隨分急いで下してたも。地且那殿內方樣へよいやうに賴むぞや。お花女郎にも緣でがな。又やがてやと出でければ。詞イヤわたしも東。道迄お供致しましよ。アヽ折角來て素戾りか。これ半七叔母は粹ぢや。跡でしつほりと話しやいの。イヤ〳〵別に話す事もございませぬ。そんなら祝うて口濡して往しや。イヤ最早お茶も飲べました。ハテ茶ばかりで濟むものか。しんこの樣な物なりと茶の子甥の子。のこ〳〵振舞や半七と。二人引寄せ腰所の。障子の中に押入れて。叔母は氣とほり堀河通り。二條通りの高瀨舟直に。大阪へ三里へ下りける。

中之巻

フシ名は堅く。人は和らぐ石垣町。前には戀の底深き。淵に憂身を先斗町。都の四季の月花を。こゝに フシとゞめて通路や。地馴染々々の色遊びの。中にお花は忘れても。わすれがたなや刀屋の半と深きつま戀に。なつく八乳の繼三味線。心くらべの連彈に思ひの色を忍び駒。心やみに餘る フシ涙かな。浮氣烏と。そやされて。月夜も闇も此の里へ。光滿寺と云ふ坊主客。お花に馴れし鶯のほけきやうとも念佛とも。知らぬが佛の斗帳ぞと井筒が暖簾撞木杖にてひらりと上げ。詞太郎內にか。四五日お目にかゝら下らぬ。エ、珍しいどつち風が吹いたぞい。イヤ〳〵どつち風でもない今夜はしよざいの無常風沙汰はない事葬禮の戻り。ちよつと寄りたい心はせく。地どうせうか斯う燒香場を。うゝに遣つてすて引導も何云うたやら。不便や今日の亡者もろくな所へ往くまい。是もお花へ心中と。雪の頬さき遠慮なく。髭口寄せて頬ずりは。山葵おろしに煮抜の蒲いたそな フシ顏の痛々し。地お花が浮かぬ顏つきに花車も亭主も氣の毒がり。コレお花どうぞいの。お寺ならば大黑。茲ではわつさり惠比壽顏して見せましや。サア笑やいのと迫立つれば。詞アヽ太郎おだまり〳〵。あれは我等に甘えるの。腹立つ所が猶うまし。詞かゝ來二階へ連れておじや。今宵は妓衆の總揚げ見事な事か。古手な着取り置いて蒲燒一種で飲明かす。鰻四五本裂かせに遣りや。南無阿彌陀佛と騷ぎ立て。フシ皆々二階へ上りける。地既に傾く宵月の夜も早四ツ半七は。銀の才覺ならず者と。茶屋には堰かれ親方に見限られつつ筒井筒。心の水もかへ乾して流れ歩きにとぼ〳〵と。格子の蔭に身を潛めお花がよすがを待ち居たる。こゝに誰とは白髮まじり金柑天窓に無用の提燈。門口にてふつと消し。詞ハア太郎左衛門樣お宿にか。花めが父西陣の。地九兵衛でござると辰巳上り

長町女腹切

に言ひければ。亭主夫婦ヤァ親父來てか。こちへ〳〵と茶釜の前太郎左衛門顔顰め。詞此の頃段々云ふ通り。其方が娘お花が事。そも〳〵小女郎の時分から手形の表丸十年。親方に損もかけず追付け年季も明くぞや。なれども勤のならひ小間物屋の煙草屋の。紙屋で候呉服屋で候。酢の蔥酢のと借錢が今の金で七八兩。地その上親父も長者ではなし。あの子にかゝる身でないか。がらり廿兩ま一年切りまし。居なりに居れば借錢も先づ其の分。賣買高い此の節二貫目ぢかい廿兩。詞其方が手取に温まれば兩爲と思ひ世話やけども。かの柄卷屋の半七と云ふ蟲がさいて。何の彼のと入性根お花が一切呑込まぬ。是からは勝手次第。半七と云ふ職人の弟子こゝらあたりの拂ひさへ。埒明かす。東塞りになつた者。打ちみしやいでも粒三文ないは知つて居る。あの樣な極道と腐り合うたお花が行末流浪は知れた事。詞小さいからの馴染なれば。よい事聞く樣にはござらぬ。どうぞ意見でも召されぬか。地壁に馬乘りかけては明くべき埒も明かぬもの。前ぴろに手形しよう爲に呼に遣つたと語りける。地門口には半七聞けば悲しさ無念さの。格子の柱噛みひしぎスエテ歯をくひしばり泣き居たる。親父は横手ちやうど打つて。詞扨々苦々しい。親方殿にお世話をかけ不孝者と申さうか。地その力屋め知つて居る。ならず者の大將菰被りの下地。地イヤ花めはどれに居る。爰へ來い用が有る。引きずりに往てお客の前で恥かゝさうかと。昔作りのつこど聲お花は、人目の恥かしく。アイあの盃藤さんさよさん預つて下んせと。言ひすて下りる箱梯子。詞ヤァとつさんか夜更けて何しにござんしたと。地そばへ寄るを突倒し。詞ヤイ不孝者。親方殿お話で一から十迄聞屆けた。半七めと云ふ騙めと夫婦にしては。年寄つた此の親が鼻の下が干上る。廿兩と云ふ金が天から降るか地から湧くか。地騙奴が挨拶はらりしやんと切つてしまひ。年切增して奉公するか否と云へ分別有り。サア〳〵どうぢやと腕捲り。地お花にはつと胸塞りスエテ暫し。涙に暮れけるが。詞なう父さん。傍輩衆は内證客さん達の手前もあり。地さもしいことを言はんする。勤する身の親達はどの口聞いても可愛や親ゆゑ苦勞をする。定めの年も近づく屆いた男を見定め。末の片附心がけ身を安樂にして見せいと。云はぬ親は御座らぬ。節季々々にせびらかし足らいで又年を切增し。地男に迄添はせまいとはあんまり酷うござんする。ほんの親より繼父は猶大事と嗜み。隨分孝行盡せどもこなさん私に微塵も憐みはござんせぬ。殺しなりと何樣なりと。分別次第にさあんせ。半七樣と挨拶切り勤はせぬとばかりにて。人目も恥ぢず大聲あげ身を悶。えてぞ泣きゐたる。地傍若無人の繼父ゑせ笑ひ。詞よう吐かすな。盗人の畫寢も當がある。おのれが母に

何の見込はなけれども。おのれを賣つて喰はう爲女夫になつた。今の詞は誰が教へた半七の掏兒めに習うたか。地べり〳〵しやべる頻けた蹴はないて仕舞はんと。むしやぶり付くを井筒屋夫婦。年の内はこちの物癖付けさせぬと捩放す。思ふ男に添はれぬからは殺しや〳〵。ヲ、殺しかねうかと。撲合ひ揉合ひ大喧嘩破れかぶれと半七。裾ひつからけ井筒屋の庭へつか〳〵〳〵。枵巻屋の半七と聲をかけ。九兵衛を取つて突きのけ眞中にどつかとすわり。詞コレ親父。其方はお花が繼父酢につけ粉につけ憎いのも理り。此の半七を掏兒の騙の强盜のとは。いつ騙りした盜みした。半七が目には其方を人賣と見たもがりと見た。よし夫は兎も角も。お花は己が女房すべい奉公仕舞うては。繼父でござらうがもがり殿でござらうが。主のある女房分別して物を云へと。地せきくる顔の靑疊。ッシ叩き散らして詰めかくる。詞ムゝツ刀屋の半七とは其方か。どれ顔見よう。はれよい男の。江戸元結に繻子髮天窓付は兩替町。内證は曾我殿見せかけ力身置いてくれ。此の年まで敗毒散一服飲まぬ此の親父。ゆすりはたべぬア、慮外ながら。親も許さぬ女房とは粟田口へ往きたいか。此の娘女房に持てば小判がいるが合點か。小豆粒程な細金さへないざまで。何ぢやお花を女房ぢや。いきがたりとは其の事。地いつそ手をよう巾着かフシ屋尻切れとぞ喚きける。詞半七ぐつとせきあげ。ムムウよう言うた小豆粒は持たねども小判と云ふ物持つて居る。來年の給分廿兩渡すからはお花は身が女房と。地紙入より金廿兩取出し。サア金でし小判といふもの近付になつて置けと。めつかうに投付くる。ヤイ詞半七。あの娘はまだ五十年が百年が顔に色氣の有る中は。奉公さして喰はねばならぬ。地千兩道具の娘を廿兩の目腐金で。女房に持たうやめかこまあなるまい何所で盜んでうせたやら。後の穿鑿喧しい。おのれに吳れると投げつくるる。詞イヤ金賣はう好みがない。おのれに吳れると投返し。地投げつけ打ちつけ摑みあひお花はわつと泣出す。太郎左衛門つゝ立ち詞コレ半七。お花はこちの奉公人親父とのせりふなら何所ぞ外で仕たがよい。門には大勢人だかり客の邪魔して貰ふまい。地それ男ども追出せ心得太兵衛長兵衛五介。ばら〳〵と立ちかゝり無理フシ無躰に引出す。地お花は譯も正體も涙乍らに取付くを。どこへ〳〵と押分くる。親父を中の關守の雪駄片足に奈良草履。足にはたらぬ半七が髻をつかんで引つたてしはオクリ目もあてへられぬフシ次第なりサア地親父も先づ歸つて諸事談合はあすの事。ハツアそれもさう然らば明日參りませう。申すまでは及ばぬが。詞花めを敷居より外へ手放して下さるな。ヤイそこな不孝者。おのれ明日來てなんとする待つて居れ。エ、地いきせい張つて咽が乾くとごぶり〳〵と煮えばなの。茶びん天窓を振立

ててッシ河原を西へと歸りける。地斯る哀の最中二階の階子ぐわた〳〵〳〵。藪から坊主の佛頂顏お花をこに何して居る。調さつきの押への盃はいつの世に戻る事。總體今夜はそなたが顏浮々せいで酒が飲めぬ。地氣を替へて西石垣の關東屋で騷がう。太郎山茶貸してだも。ハア殘りの子供は西石垣が天竺へも御同道。地お花一人は我等が內。手放しては內證に氣遣ありまの。いふな〳〵。調皆迄云ふな湯の談合か。湯治するなら遣ひ錢見事な事かと金三兩。衣の下より投出せば。是こそほんの忝け有馬の湯のだんこ。歌やれゆのだんこ〳〵今は有馬の湯のだんこしよんがる。西石。垣へと三童へ騷ぎけるッシ同じ所も西側は。祇園丸山前にうけ。芝居の檜暗き夜も。行きかふ人の提燈は月もッシおろかと照渡り。見おろす〳〵。地おろす駕籠からぬつと出た。炮烙頭巾の醫者殿は。藥師如來の引合せ盡屋の客と脈をとる。それ〳〵〳〵花車も亭主も槌で庭掃く人呼びに。走る足許おかるぢやないか。調お玉ぢやないか。お玉やあい。はて是から呼んで居くものか。わけもない事云はん紋紗の衣着て。ぞめき姿のから坊主。後姿見た樣な。ヲヽそれよあれは愚僧が五人組。萬年寺の同宿忍び戀路の擂みどり。ふかみどりやの小丁稚が。一中節の川風に聲も廣がる扇屋の。仲居のまんが供して通る彼は澤村長十郎。あつたら男を。やがて大阪へ下り舟。歌流金子も離波津へ。咲くや此の花其の花の。ッシ壇も戀の種ぞかし。地苦のない女郎の仇口を聞くにも增る涙の露。お花は一切氣も浮かず四條の河原幾萬人。ぞめきの中に彼の人がもしやと目をも花色の。長範頭巾しよんぼりと番屋の蔭にたゝずみしは。慥にさうぢやァヽちよつと逢ひたい。云ひたい事も山茶の手前。客の手前もはかりかね。床柱に打凭れッシ念佛申して紛らかす。地料理人の傳介盃を下に置き。調ヤア花樣の念佛で思ひ出した事がある。三味線小歌も古めかし。町方に流行る阿彌陀の光と云ふ事して。御一座の妓樣方どれにても阿彌陀如來に當つた者が。豆腐と酒と貫ひに行く役人。色里に無い圖な騷ぎ。妓樣方いかにと云へば。地ヲヲ是はめづらしい早う〳〵と紙押廣げ。蜘蛛の巢御光延紙引きさいて錢の高。もみ鬮は惠方果報後に無理云ふまいぞ。サア今が大事の所と鼠啼してしめあけに。調さよさまどうぢや十六文。お仕合〳〵。藤さまは三十六文小めろの林は十文。地それははまなみさゞ波や。滋賀樣たつた二女か。お杉はなんほ悲しや己は三百ぢや。調エヽ儘よ前垂質に置かう迄。ヲヽ云やる迄ない錢がなくば地布子をはぎさんしまさん。是も如來ははづれた。サア是からは花樣きり〳〵もみ鬮明けさんせ。アヽ忙しい何ぞいの。私がやうな因果人がなんの阿彌陀になるものか。これ見さんせと押しひらけば。地そりやこそ云ばぬかサア花樣が阿彌陀ちや。

詞名代は叶ひませぬ妓樣に豆腐買はして居作ら田樂喰べませう。地きつう座敷が洒落れて來たサア フシ面白いと笑ふにぞ。地お花は何がなかつけに出たいは心一杯。猶も色目を語られじとアヽ迷惑。詞そんな事に今まで歩いた事なけれども。てんほのかは往てのけう。其の間に用意しておかんせ。地ヲヽ、用意擂子鉢刷毛擂子木斜に構へ。待つて居ります早う〳〵。詞ハテそこらは合點ぢやと。地姿も下女に二世かけし男の爲や徒歩跳足。つひにきなれぬ置き手拭急けばまはる。小褄ほら〳〵杉が前垂かり橋を。フシ足もしどろに行き過ぐる。地半七は番屋の蔭ちらと見るよりコレ〳〵〳〵。笑に居ると招かれ。ヤア半さんかいの。逢ひたかつたと抱合ひスエテとかうは涙ばかりなり。詞コレ泣いて居ては濟まぬ事。今宵中に大阪迄退かねばならぬサアおぢやと手をひけば。ヤア待たんせ先刻の小判どうしての才覺ぞ。詮方なさに怖い事などさんせぬか。有樣云うて落付かせて下んせ。云ふ迄もない事此の身になつた半七を粉にはたいても一歩一ッ誰が貸さう。先度の脇指三十二兩に賣拂ひ。地銘なしの下坂すも燒もかはらぬを。八兩で買替へ二兩で銘を彫らせ。拵へ濟して大阪へ下し。詞其の賣へぎの廿兩たとへ首になるとても。もう取返しのならぬ事。此の上ながらも罪に遭はば我一人。地叔母婿叔母にも難儀をかけずそなたの行末頼むため。心ざすは大阪。誠に和女の磯父が盜人と云うたも嘘でない。我が身で我が身が恐ろしいと。語ればお花も身を顛はし。サアそんな事であらうと推量に違はぬ。いとしや私故種々にお身を狂はする。詮議の時は皆私が業にして身を遁れて下さんせ。詞ハテ罪にあふとも逃るゝとも。分け隔てはないわいの。地ほんにさうぢや女夫ぢやものとスエテ又締寄せて泣く中に。地跡の二階に花樣遲いこりや豆腐に買はれてか。迎ひに往けと聲々の南無三寶。見付けられては足元暗き井堰の石に踏みくじき長き紅絹裏足縺ひ走るとすれど夜中の太鼓。どん〳〵ぐりの辻を出づれば建仁寺。だらりが鳴るぞだらつくまいぞ。駕籠よ〳〵と呼ばれども無いか聞かぬか耳塚の。西に錦座の名のみにて小錢なければ草鞋も。二足を小判一兩で買うて。窄く身ぞ三重〳〵哀なり。

おはな半七道行

ハルフシ幾夜々々の。憂き動。七枚起請そら誓文。日本國の神さんを欺した罪か欺された。人の恨かねたみぐさ。つひに我が身の下り舟。スエテ乘後れたる淀堤。淀の河水行く末は。いかなる罪に大阪の。道がどこやらフシ何里やら。ハルフシ身は初雁よ。初霜に。寢亂れ姿忍ばしとオタリ前垂。取つて丸ぐけの褌をぢみな抱帶。しやんと結んで引締めて。フシオクリ歩むと。すれど。行き剛れぬハルフシ道はかどらぬ。女旅。これも何ゆゑ男山。作りし罪は山崎の。スエテ麓はるれよ

あはれけに。いつか都へ歸る山。春は梢に。いろ〳〵の。花咲く山にと山巡り。地となりは青し夏山の。かしは散るてふ卯の花や山時鳥山あひの。景色の花に顏つくる。笠を傾け。山めぐり秋はさやけき月影の。到らぬ山は無けれども。地わけて名高き山かけの月見る方へと。山めぐり扨又冬は。遠山の。霙もてくる雲のあし。上地ひこ〜き雁は南向き。北を後に山のこす。山又山や峰白し。雪を誘うて山めぐり巡り〳〵て。フシ山姫の。山茶交りの淨瑠璃も。夕限りの口癖や。長地今日は姿を町風にやつすとすれど隱れなき帶の牧方。近くなる。松原過ぎて河邊を見れば。あれ〳〵〳〵五ッばかりの子を眞中に。フシ乘合舟の女夫づれ。思ひなき身の高笑ひ。餘所のつまごと羨し。歌流れわたりの。情であろと。網の目にさへ戀風が溜る狹の。狹の上風。身に染々とせめて一夜は嘘なしにほんの女夫と。フシいつの世に。いはれつ云はん。情なやと抱き締めたるそぎ袖も。フシ涙にひたすばかりなり。間夫で逢うたも一昔。それ覺えてかの〳〵と二人火燵のじやらくらを憎や。地一昨年の十七日のおぼろ月。宵の我酒にほ巢鳥に起されて。あかぬ別れの朝より。日文血文の付屆け。半太夫いよしごけんと書いたるはほだしの種か。カン花ずすきほんに誓文フシいとしさに。幾夜の夢を。結び文。方樣まるる。フシ花よりと思ひ。まるらせ候べくの。わけの盃色見えて。わきていづみの思はくは只逢ひまして。〳〵。又の御見をまつかしくハルフシその言の葉も。地昨日といひ今日と暮して飛鳥川。流れの里ははる〳〵と跡に長柄の。夕あらし。髪のおくれのはら〳〵〳〵。共に亂るる我が心鑒ある身は恐ろしの。お城も近き難波江のよ。し。あし知ってはまる身を。意見は釋迦に京橋の此方の森を隱家と誓く。勞を三重へ晴しけり。

下之巻

締めたるそぎ袖も。フシ涙にひたすばかりなり。間夫で逢うたも一昔。それ覺えてかの〳〵と二人火燵のじやらくらを憎や。地一昨年の十七日のおぼろ月。宵の我酒にほ巢鳥に起されて。あかぬ別れの朝より。日文血文の付屆け。半太夫いよしごけんと書いたるはほだしの種か。カン花ずすきほんに誓文フシいとしさに。幾夜の夢を。結び文。方樣まるる。フシ花よりと思ひ。まるらせ候べくの。わけの盃色見えて。わきていづみの思はくは只逢ひまして。〳〵。又の御見をまつかしくハルフシその言の葉も。地昨日といひ今日と暮して飛鳥川。流れの里ははる〳〵と跡に長柄の。夕あらし。髪のおくれのはら〳〵〳〵。共に亂るる我が心鑒ある身は恐ろしの。お城も近き難波江のよ。し。あし知ってはまる身を。意見は釋迦に京橋の此方の森を隱家と誓く。勞を三重へフシ急ぐとすれど。地秋の日の短かきあしの難波潟。京橋より暮れかゝり問へど隱れも長町の。伯母の家造常々の咄に大方かゞあてゝ。伽羅細工の甚五郎樣は此方かと。くゞりあくれば。アゝいかにもこれが甚五郎。詞どれからぞと云ふ叔母の聲。イヤ京の半七下りましたと。地お花諸共つゝと人るっ。詞ヤア是は〳〵珍しい。文の來たは一昨日間もなう何の用あつて。地ヤ連も有るさうなどなたぢや是へとあひしらふ。叔母樣お久しうござんす。詞いつぞやお目にかつた花と申すもの。御無事で目出度う御座んすと。地腰打ちかくる二人の體心得がたく思ひけん。ハアようこそとばかりにてフシ不思議。さうにぞ見えにける。地半七色を覺られじと。詞お花ことも奉公の年明き。和泉の親許へ歸る道幸ひ同道致しました。イヤ先づそれはさう。地詞への脇差先樣は侍來お氣に入つたかいらぬか萬一お氣に入らいで。甚五郎殿や叔母樣に難儀のかゝる

事あらば。其の難を私が身に受けうと存じ参つた。其の次第が氣遣などうで御座ると言ひければ。詞アヽ爰な人つがもない。細工がお氣に入らぬとて何の此方や其方に難儀がかゝる物ぞいの。其の上悦びや一昨日下ると其の儘。お屋敷へ持参めされしに。地柄まはり縁頭鞘の塗。萬事殊の外御意に入り。甚五郎が女房はよい甥を持つた仕合者。後々はお屋敷の御用も仰付けられ。出入させとの御懇いよ〳〵細工に精出しやと。聞くより二人は手を合せ。エヽ有難い忝い。天道のお助け命拾うたお花悦びや。嬉しうござる胸の痞がすつと下つた。詞ヲヲ道理々々。武士を相手の商賣大事に思ふ其の冥加。詞今日また俄にお屋敷から脇指について。何やら急なる御用とて甚五郎殿を召に來て。地蓋過ぎから參られ今に於て歸られぬ。定めてお悦びに刃渡しの御祝儀。お振舞が有るさうな定めし醉うて戻られうと。云へば半七色違へ。詞ムヽ脇差に就い。て急用とて又呼に來ましたか。地サアお花京から道中云ふ通り。かう有らうと思ひしし事我は是に待ちうけ。甚五郎殿に對面し脇指の御祝儀身に受けて祝ひ。運に依つて今宵中にお屋敷へ。召出されうも知れぬこと。そなたは此のあたり旅籠屋に一宿し。明日は早々親許へと云ふ聲付もしを〳〵と。さうしては半七が一分は立たねども。アヽなんとせう暇乞ぢやと。胸に手を組み俯向きてフシ涙を。隱すばかりなり。お花も涙に聲慄ひ。聞えぬ事云ふてくだんする。悦びも悲みも二人が身に引受ける。約束ぢやないかいの。甚五郎樣に逢ひまして有無の事を聞く迄は。私は爰を動かぬ。叔母樣も女子ぢやが男の一世の大事の時。見捨てられうか。コレ半七樣。慾い事云ふお人やとスエテ恨み喞ちて。泣きければ。詞二人の顏をつく〴〵見て。其方衆が云ふ事は何の事やら此の叔母は。すつきりと合點がいかぬ。此方のつれおひ甚五郎殿は武士附合して堅い人。半七も侍筋行儀强い若い者と。常々自慢し置きしにそれにお山を同道し。初めて對面させられうか。地一町北はみな宿屋二人ながら早う往て。甚五郎殿に逢ひたくば半七ばかり明日おじや。夫婦にも成畢せ首尾よい後はお花とも對面さしよ。今にも歸られ此の體見せ。大事の甥をつれあひに見限らするが口惜しい。此の世話やむも大切さサアフシ はや〳〵と氣をせけば。御憐みの忝さ涙が溢れ有難し。詞然らば叔母御へ一寸内證申す事有りと。にじり寄ればヤア待ちや。地歸られうかと思ひあぶ〳〵すると。庭におりて潛り戸のかけがねをしやんとかけ。サア何事ぞ氣遣はし語りや聞かうと云ふ所へ。甚五郎邊だしく門叩いて。いま日が暮れて門しめる明けよ〳〵と云ふ聲に。そりや情なや歸られた如何せん。借屋の路地へも廻されず押入には夜着布團。何所へ隱さんかやは隱るゝ。帷子入れて夏過ぎし空長持に秋の鹿。つまもこがれて

諸共に フシ押隱すこそ哀なれ。地蓋を押へて聲立てまいと欠伸ながら。詞アヽとろとろと假寢の。寢耳にけはしい叩きやうと。地くゞり明くれば甚五郎せきにせいたる顏色。血眼になつて駈上り。詞ヤイ女房ども。甥の殿に掛つて此の甚五郎が身代破滅。命の大事になつてきた。此の脇差折紙附正銘の信國を。今の世の廢物下坂にすりかへ。銘を似せて突きつけた。地先は武家方出入の門。盜人は女房の甥此の甚五郎が。存ぜぬと言ふ言譯ならず。京へ證議に登つては駈落者と町内へ。付居にあうては人中で口利かれず。死ぬるより外文殊の智惠にも能はぬと。脇指からりと投出し フシ溜息ついたるばかりなり。地叔母ははつと胸塞り。扨は半七が身に覺ある詞のはし。思ひ當つて逸方にくれスエテ暫し。應答もせざりしが。地半七元より覺悟の前長持の蓋押上げ。出でんとするを睨みつけ〳〵。脇差取上げなう甚五郎殿。詞わしは女子の物の道理は知らねども。ついて廻る身の因果は。大名高家智者學者も免れず。地是は正しく半七が業なれども。半七がして半七はせぬ心。詞何を隱さん元彼の信國は。常々語りし我が家に三代迄は祟ると云ふ。地性にふさはぬ脇差一目で是はと思ひしが。詞武士の上こそ刃物の相性町人職人に成り果て。地何の咎めの有るべき親もない一人の甥。是をつてに一國のお細工の得意つけたさに。私がさもしい心から律義全い半七に。惡根性が付きそめ身の大事仕出したも。いきまはつて三代目の手に觸れしその祟。知つてゐながら此の叔母が押事したる其の咎め。因果とぼかは フシ思はれぬ。地恥かしうござる甚五郎殿。男を養ふ女子も有る。廿年足らず連添うて何を男の爲もせず。身の難儀をかける事怨にあらう憎からう。それが悲しい面目ない。許して下され甚五郎殿と。夫の膝にどうど伏し フシ聲も。惜まず歎きしはことわり。過ぎて哀れなり。地甚五郎も男氣の夫婦の中に何の面目。女房の甥の仕業存ぜぬと云うて。此の甚五郎が立つものか。見ず知らずにも義理に依つて命を捨つるは男の役。氣遣するな首切られうが。牢へ入らうが。皆我が科に引き受け。半七に憂目は見せぬと心は利發に逸れども。差當つて相手づくスエテ思案に暮れてぞ見えにける。女房は手を合せ。アヽ情の末とて忝い。侍衆は斯樣の事を皆御存じ。脇差のいはれを申し叔母一人の科に落し。此方にも半七めも罪を脫れて下されと。脇差取つてするりと抜き。地本のは信國是は下坂。作は替れど燒刃寸尺一對なれば。一家に祟るは同じ事是故に父樣が。人を討つて其の刀でまつ此の樣に押肌脫ぎ。地逆手にとつて左の脇ぐつと立てゝと云ふ詞。直に突きたて右へさつと引廻す。是はいかにと甚五郎縋付けば半七夫燐飛んで出で。叔母樣狂氣か情ない。身に覺ある故に死に來た半七と。脇差に取付くを突除けて。詞ヤイたわけも

のそちを殺す程ならば。なんの叔母が長口上自害をもするものか。手の悪い事したれども駈落して身も隠さず。叔母婿の離儀を思ひ身を捨てて來た心。さすが筋目程あつて。せめても是はでかしたな。そちが父御は我が兄様。最期の時に頂りし甥なれど。着替一ッ帯一筋何を惜しき事もなく。預りしかひも ッシなかりしに。詞大事に代る命其方には遣らぬ。皆兄様への奉公ぞや。叔母さへ死ぬれば科は一人に極づて。脇差は上り物外に御詮議は残るまい。刃物の祟も三代濟む。地行末目出度う出世して親祖父の名字を繼ぎや。サテ早う往きや〳〵と。深手に息もきれ〳〵の血汐に落つる涙の體。花はわつと咽返り半七は猶涙にくれ。叔母叔父は親同然禁礫にかゝるとて。一寸も退きませぬと。取りつけば甚五郎。詞エヽ不合點な。其方が爰に狼狽て叔母に犬死さするかと。地二人を取つて突出しかけがねくるるしつとゝおろせば。なうそんなら退きませうま一度逢はせて下されと。夫婦は門に打凭れスエ聲を揚げてぞ泣き居たる。叔母は苦む息づかひ。ナウ甚五郎殿。詞人立のない前に早う死にたい止は。どこぢや地どこじやと悶ゆれば。涙ながら甚五郎。女なれども武士の切腹止とは勿體なし。介錯せんと立寄ればいや〳〵。詞人の切つたと我が切つたは。班改めに顯れて此方の言分むつかしい。急所を敢へて地下されと男増りの自害の體。夫はいよ〳〵心くれ。爰を爰をと我が喉吭を。指せば頷き振上る。手も弱りはたと落ちて。太股に突立る又振上ぐれば突外し。肩先がばと突込んだり。左手へはづれ右手へはづれ苦む顔色。夫は悲む南無阿彌陀。南無阿彌陀佛の聲を力に咽のくさりを一刀。うんと許り目もくれなゐの薄もみぢ。夜明の嵐に散失せしッシ はかなき最期ぞ是非なけれ。地歎の聲は何事かと向ひ隣裏借屋。潛戸蹴放し駈入つて。やれ女の腹切自害よと。組中年寄月行事。町代夜番が棒ちぎり木ばつたくさばにおく霜の。はかなき命南無阿彌陀南無阿彌陀佛疑なき。西方極樂淨瑠璃に語りて哀れを留めける。

右之本令吟覽頌句音節曼譜等不殘毫厘令加筆候可有開版者也

竹本義太夫

重而予以著述之本令校合候畢全可爲正本者歟

近松門左衛門

京二條通寺町西入町

正本屋　山本九兵衛版